

これまで、いくつかの御雇外国人教師自身の手による日本滞在記の存在が知られ、すでに出版をされている。しかし、子孫のために書き残した「自分史」は存在自体の確認も難しく、また存在が知られていたとしても閲覧から、翻訳・出版に至るまでには各家庭のプライバシーの問題もあり、なかなか許可の得られない場合が多いであろう。このような点でも、貴重な意味を持つ翻訳・出版と言えよう。御雇外国人教師について関心のない方にとっても、明治期日本の歴史の断片を外国人が書いたものとして、本書の内容は興味あるものと思う。

(高安 伸子)

(文同社、東京都中央区銀座八一―一五四、電話〇三―三五四五
—一六六一、一九九一年、B六判、三二五頁、二、五〇〇円)

北里研究所附属東洋医学総合研究所刊 医史学文献研究室編

『小品方・黄帝内経明堂 古鈔本残巻』

書物を愛するものにとつて、その書物が貴重なほど楽しみが深い気がするの私だけであろうか。尊経閣文庫に、世にも希なる書物ばかりを集めた前田公という人は、たぶん書狼の類だったのだろう。

このたび、その尊経閣蔵の『小品方』と『黄帝内経明堂』の貴重書が、北里研究所附属東洋医学総合研究所の二十周年記念として、医史学研究室によって出版されたことは慶事で

ある。地上に一点しかない貴重書を出版することに同意された尊経閣文庫の英断と、出版に至るまでの編者の努力とは賞賛に値する。

この書物は以下のような内容で成り立っている。

凡例

『小品方』巻一原色影印

『黄帝内経明堂』巻一原色影印

『小品方』巻一翻字

『黄帝内経明堂』巻一翻字

『小品方』書誌研究

『黄帝内経明堂』書誌研究

あとがき

『小品方』『黄帝内経明堂』とも原色写真版で影印されており、それぞれが非常に鮮明ですばらしいものである。特に朱点までくつきりと写っており、本になるまでのなみならぬ苦労が感じられる。さらに翻字と注釈の周到な配慮も行き届いている。桜井氏評の嘆きもうべなるかなと思われる。

『小品方』が中国で佚亡してから一千年余をへて出現した経過は、小曾戸洋氏の「『小品方』書誌研究」に詳しい。この『小品方』巻一の伝来とその文献学的研究はこの書誌研究で精致に論じられ、今日最高の水準である。

その『小品方』は、序文で述べるようにこの書が繁雑になりすぎた当時の処方集をまとめる意味合いをもち、さらに患者の体力の強弱や年齢性差を論じ、疾病の地方性を重視して、

その地方にあった処方を取りあげる臨床的な態度から出発している点に特徴があると思われる。過去の処方集を集約して事足りりとする態度に飽き足らなかつた陳延之の医学思想は、高く評価されるのではないかと思う。だからこそ、後世この本が唐令においても日本においても医師が習学すべき教科書となつたのであろう。

さらにこの『小品方』の目録から重要なことが読み取れる。『張仲景弁傷寒并方』と『張仲景雜方』の二書が引用されているが、今日通用している『傷寒論』を構成する重要な理論である「六経弁証」に相当する目次が見られないことである。陳延之が張仲景の著作を引用しながら、「六経弁証」を用いなかったのはなぜか。非常に興味ある問題である。

また編者によつて与えられた『小品方』の成書年代（上限は四四四年、下限は四七三年）はこの書以前の医書を研究する上でも、またこの書の影響を考察する上でも重要な年代である。胡乃長、湯万春、高文桂らによつて考えられた年代推定はすでに過去のものとなつた。この年代の学問的価値には、はかり知れないものがある。かならずや、中国医学史研究の一里塚となるであろう。

『黄帝内経明堂』もまた『小品方』に劣らず重要な書物である。この書が仁和寺蔵の国宝『黄帝内経明堂』に優るとも劣らない名宝であることは最近まで知られていなかった。この発見もまた編者らの功績に帰すものである。『黄帝内経明堂』が、鍼灸の古典の『甲乙経』に引用されることから、この

書の成立が非常に古い時代であることがわかる。唐の楊上善が注釈したこの『黄帝内経明堂』こそ、その姿をうかがうただ一つの書物である。この重要文化財が国宝より史料的价值が高いという編者の発見も、ある種の文献学の皮肉である。この本の持つ価値を述べ尽くすには、すでに紹介者には荷が重すぎる。ただこの書物を篤学の士に勧めることだけが私の役目である。

(猪飼 祥夫)

(発売取扱・新樹社書林、東京都千代田区猿樂町一―三―六一三
〇二、電話〇三―三二九三―五六九一、一九九二年三月刊、B
4判、九八頁、定価一五、〇〇〇円)

コンスタンス・ジョエル著、内村瑠美子訳

『医の神の娘たち―語られなかつた女医の系譜―』

医学の歴史は、決して発見や発明の、あるいは国家的な制度や事業のみの歴史ではない。またそれは偉業を成し遂げた人物のみが記されるものでもない。近年、医学の歴史、また歴史の中の「医」の問題はさまざまな角度から研究、論述され、古典的な医学史の幹から多くの太い枝が張られるようになってきている。本書はそのような枝の一本であるか、あるいは幹そのものを裏側からみたところであろうか。これは古代から現代に至るまでのヨーロッパで医に関わつた女性たちの歴史である。